〈教育実践研究〉

教職ゼミにおける教員養成の取組み（5）
―教職への意識涵養と基礎的資質能力の育成：異学年による合同学習における学びを中心にして―

矢田貞行 *

はじめに

開放制の教員養成に基づく大学・学部においては、一般に教職志望の学生は、大学１年次から教職課程を選択・履修し、教職・教科に関する科目、教科指導法ならびに教育実習等の単位を取り、教員免許状を取得する。そして､概ね主としてこれらの科目履修や介護等体験､教育ボランティアの経験等をもって、学生は大学の養成段階において教員として必要な基礎的資質能力を修得するとされている。しかしながら、大学ではこうした授業以外にゼミという授業形態が存在する。ゼミは少人数編成で、大学教員と学生、学生同士の個人的触れ合いや切磋琢磨を通して、単に卒業論文の作成といった研究側面のみならず、学生の人格的陶冶や人間的成長を育む可能性を秘めている。

予てより筆者は、このゼミの持つ教育的機能に注目し、教員を目指す学生の教師としての基礎的資質能力の涵養・育成の場としてゼミを活用してきた。東海学園大学スポーツ健康科学部では、３年次から学生は、それぞれの興味・関心、進路等に応じてゼミ選択を決定することになっている。それに先立ち２年次秋学期終了時に、希望するゼミ教員と面談を行い、その話し合いに基づいて担当教員が可否を決定し、学生の選抜を行った上で所属するゼミが確定するシステムを採っている。

ゼミ学生を募集する段階で各教員は、表１に示したような募集要件（専門演習Ⅰ～Ⅳのシラバス）を提示する。これまで筆者のゼミでは、教職を第一に志望する学生を対象に３～４年次の二年間で教員として求められる最低限度の資質能力の育成を図ることを目的にゼミ学生の募集を行っている。たとえば３年次では、翌年の教育実習を念頭において模擬授業（中・高保健、小・中道徳）を中心に学習指導案の立て方、教材研究の仕方、実際のそれらに基づいた授業実践、授業分析・評価等の取組み、４年次では教員採用試験を念頭においた受験指導（演習形式による教職教養の学習、模擬面接、集団討議、場面指導等）を実施してきた。

すでにスポーツ健康科学部編『教育研究紀要第４～７号』において、３年次の専門演習Ⅰ・Ⅱの模擬授業について報告を行っているので、本稿では４年次における専門演習Ⅲの授業内容を中心に報告をすることにする。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

表 1. 専門演習のシラバスの概要

【1. 授業の目的】
教員を第一志望とする学生を対象に、①教職教養の基礎的知識の習得、②模擬授業の実施を通して実践的指導力の基礎の育成、③教育時事をテーマに卒業論文を作成する資質能力の育成を目的とする。
【2. 到達目標】
① 教職教養の基礎的知識を習得して、教育問題を考え、その解決に取り組むことができる。
② 教材研究・学習指導案を作成して、模擬授業を実践することができる。
③ 教育時事をテーマにして、卒業論文を作成することができる。
【3. 授業方法】
① 教職に関する基礎的知識の講義と演習
② 模擬授業の実施とそれに先立つ個別指導
③ 教員採用試験の受験指導（主に 4 年次春学期）
④ 卒業論文作成のための個別・グループ指導
【4. 過去の卒業研究のテーマ】
いじめ、不登校、部活動、体罰によらない指導法、教員の働き方改革、外国籍児童生徒の教育、諸外国の体育、特別支援教育、児童虐待、体育嫌いの子どもの指導、等
【5. ゼミ生の受入れ方針】
☆教員を第一志望としており、教員になるための努力を惜しまない人、教師としての人間力を磨ける人を求めます。☞教師の仕事は、学習指導のみならず、生徒指導、学級経営など、多岐にわたります。そして何より人間性が問われます。教師は、子どもたちの模範であり、リーダーであると同時に、さまざまな子どもたち（不登校やいじめ、問題行動に走る子、学習障害を抱える子、複雑な家庭の子など）と 1 人 1 人向き合い、寄り添える度量、心の広さが求められます。また、学校においては同僚の先生と「チーム学校」の 1 つの歯車として協働できること、さらには保護者の方との信頼関係、地域の人達と円滑な人間関係が構築できることなど、“先生”と呼ばれるこうした資質能力の育成は、教師を目指す学生時代からすでに 1 歩が始まっています。皆さんのこれからのゼミの学びと自覚が、将来への教師への道につながるということに気づいていただきたいと思います。
☆**“皆で教採を目指してがんばるゼミづくり”**をモットーにするので、ゼミ生同士で協働・協力してゼミに参加できる人を求めます。自由で緩やかなつながりで良いが、教採合格を目指す点においては 1 つにまとまれるゼミづくりを目指します。☞協同学習の成果…教採は同じ教職を目指す仲間同士が教え合い、学び合い、切磋琢磨しながらがんばることで、図り知れない成果を生みます。また、人に教えることで知識の定着率も格段にアップすることが、アクティブラーニングの根拠になっている“ラーニングピラミッド”において証明されています。皆で学び合うことで“教職の仲間”ができ、学校でもこうした教師の同僚性が先生同士のまとまりや絆となって「チーム学校」が生まれていくことを知っていただきたいです。
☆こうした皆さんとの学びを通して、これから 2 年間、さらには卒業後もお付き合いできれば、この上ない歓びです。教採の合格を目指して若い人たちと一緒にがんばれる、そして立派に教師として活躍している卒業生の姿を見ることが“シニア教授”の生きがいです。一緒にがんばりましょう。

Ⅰ. 授業の概容

本ゼミでは、令和 2 年度から数回にわたり 3 年生と 4 年生を合同で行うことにしている。まず開講時 3 年次学生に対して、表 2 に示すようなアナウンスを行っている。特に今回授業報告を行うゼミに関しては、卒業論文や模擬授業に係る指導以外に、4 年生と共同学習を行う旨を通知し、彼らに対する学修への動機づけと並んで、教員採用試験に対する 4 年生の学びの姿を見せることで、何らかのプラスの効果を期待しているからである。

毎年本ゼミを希望する学生の特徴として、1 ～ 2 年次にこのゼミに所属して先輩の行う模擬授業を体験した者が多く、教師役を務めた先輩の姿を見せることで、良い意味でインパクトを受けた学生が少なくない。先輩のような模擬授業をやりたい、模擬授業を自分も経験して教師としての基本的な学習指導力を身に付けたいこと等を志望の理由の 1 つに挙げる者が多いのは事実である。

先輩が後輩を教えるという形態を模擬授業で採っているのも、同級生同士の者が教え合う、学び合うよりも得る所が多いからである。年長者が年少者を教えることは、曲がりなりにも“教師の権威”が発

揮できるが、他方通常の教科指導法で行われている模擬授業では、同一年齢の者同士の教師・児童生徒関係では上下関係がないため、教師の指示や働きかけに受講生の学生が従わないケースが往々にして見られる。

また、秋学期（専門演習Ⅱ）には、座談会形式で先輩の合格体験談を聞く機会や採用試験の学習方法についてゼミ４年生との交流を図る機会も設けているが、これも春学期で培った人間関係を通じてお互いが旧知の仲になれば、一層綿密且つ親密な雰囲気の中で先輩と後輩の交流が図れるであろうという目論見もある。

表２．授業の概要

【春学期】
・４～５月教材研究、学習指導案を作成する。個人指導を中心に行う。（水３）５月中旬～７月模擬授業（中・高保健）を１年生（水１「基礎演習Ⅰ」）、２年生（火３「専門基礎演習Ⅰ」）に分かれて行う。
・７月卒論指導を行い、テーマ設定と卒論進捗状況報告書を作成する。３名までグループ可とする。
・なお、数回４年生と合同で行う。教職教養・教育時事について、教員採用試験の受験勉強の一環として４年生と一緒に学ぶ。
【秋学期】
・９～10月教材研究、学習指導案を作成する。11～12月模擬授業（小・中道徳、高保健）を１年生、２年生に分かれて行う。
この間、教採合格者体験談座談会（４年生による教採学習方法の指導等）あり。
・卒論作成（１月卒論中間報告書提出）の準備を行う。
（次年度春学期は、教採対策講座（教職教養・教育時事）、及び卒論指導を行う。秋学期は、卒論作成に取り組む。）

Ⅱ．合同ゼミの意義

これまで本学部では、いくつかのゼミにおいて３・４年次を合同で行う所も見られ、二つの学年にわたる学生が同一教員の下で合同学習を営むことによるメリットも決して少なくない。とりわけ教職を目指す学生が、同じ学びのプロセスを共有し、協働することで次のようなメリットがある。

1. ４年生の教員採用試験の受験勉強の様子をつぶさに見て、学ぶことができる。

これまでは３年次の秋学期から教員採用試験の準備を始めれば良かったが、ここ数年の試験の難化（特に中高）により、早目にスタートさせる必要性に迫られている。

また、先輩の学習の様子を目の前で直接垣間見ることにより、何をどう学べば良いのかの絶好の機会となり得るし、教職教養の学習や今学校現場で何が問題になっているかを具体的に学ぶことで、その教育時事についての現状を知ることができる。

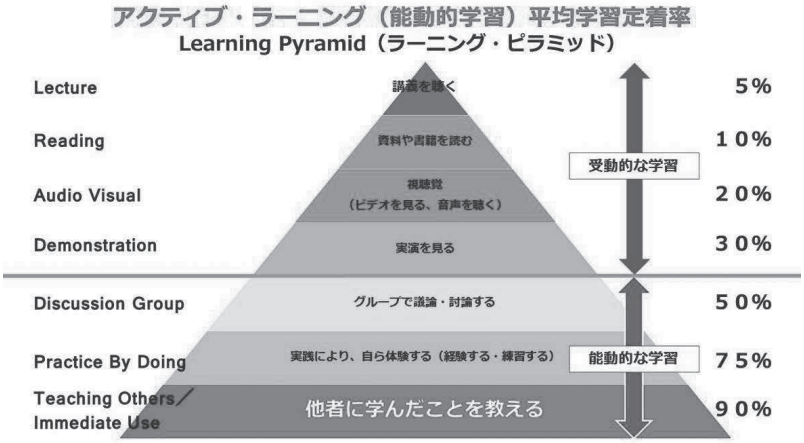
2. ４年生との交流を通じて、教え合い、学び合いが可能になる。

後述するアクティブラーニング（対話的、主体的、深い学び）の浸透においても明らかなように、従来の教師による一方的な授業や暗記中心の勉強では、これからの予測困難な時代はもはや生き抜いていくことができない。お互いが話し合い、対話を重ねて知恵を出し合いながら、このような時代を生き抜く力は、まさにコミュニケーション能力の育成にあり、その中で他人の意見をしっかり聴き、自分の考えを述べ、協働して人とやっていくことを通じて培われる。また他方では、特にこれまで日本の学校教育は、同一年齢による編成で一斉学習を行ってきたが、その形態は不登校やいじめなどの深刻化でその限界が見え始めている。

ところで、一斉に皆が同じ場所で均一に学ぶのではなく、年齢の異なる者同士が学び合うという学習形態（例、イエナプラン）が近年小学校を中心にして脚光を浴びている。文脈は若干異なるが、フリースクールでは、同一年齢でうまくやっていけなかった子どもたちが伸び伸びと活動し、不登校を見事に

克服している。またそこでは、いじめも起こっていない。年長者が年下の者の面倒を見たり、庇ったり、年少者が年長者に教えてもらうといった、協働の場が随所で可能になっている。異年齢集団との合同学習には、このようなメリットが存在する。

加えて、協働して学修する意義については、現在学校現場で取り組まれているアクティブラーニングの根拠となっているのが、図１に示すラーニング・ピラミッドにも示されている。この図からも明らかなように、知識の定着度は単に講義を聞いているだけでは記憶に残りにくく、他人に教えたり（本当に理解していないと教えられない）、実際に自分でやってみたり（実験する）、グループで議論・討論するという、アクティブラーニング型の学習法が最も効果的である。教え合う、学び合うコミュニティ（仲間づくり）が大事であるとされる所以はまさにここにある。これは、単に学校教育の場、学級での学びに留まらない。大学のゼミにも十分応用できる学習理論である。



（出典：*The Learning Pyramid*, National Training Laboratories, 1946.）

図１．ラーニング・ピラミッド

Ⅲ．授業内容と実際

１．授業内容

本年度の専門演習Ⅲの実際の授業内容については、次の通りである。基本的には、朝の会（①出欠・健康観察、②漢字の練習、③教師のショートスピーチ）を担当学生が行い、その後教育時事を中心としたテーマに基づき、中央教育審議会や文部科学省、教育委員会から出された重要な教育答申等を取り上げ、解説、それに関連する動画の視聴、その後のそれに関するグループワークによる討議、意見交換・発表、過去問の演習、本時のふりかえりというプロセスで授業を締め括っている。（学生が担当するのは、朝の会のみ。）

次いで、具体的にある１日の授業の実際について取り上げる。まず担当学生による朝の会では、①出欠・健康観察を行う。１日の始まりである健康観察は、児童生徒の体調が良く、十分な睡眠、朝食をしっかり摂って登校することが何よりも大切であるからだ。その際教師は、1人1人の顔色や表情にも注視し、笑顔で出席を確認することが大事である。表情が冴えなかったり、元気がなく笑顔が出せない子どもには特に注意を払っておく必要があり、「どうしたの？」といった声がけもしなければならない。とりわけコロナ禍の下では、なおさら上記の子ども１人１人に対する健康観察と教師の言葉がけが重要になっている。

次いで、②漢字の練習を行う。漢字については、教員採用試験は言うに及ばず、教育実習においても実習生は正しい書き順で、誤字脱字がなく板書することが須らく求められる。漢字の間違いは教師にとって致命的であり、児童生徒や保護者の信頼を損なう一因にもなりかねないからである。

その後、③教師のショートスピーチを３分間程度、児童生徒に対して行う。これも話し方の練習の１つであり、実習時における朝の会の司会において担任教師として求められるものである。話題の豊富さという引き出しも教員の資質能力の一端であり、それが多ければ多いほど、教師の魅力も増してくる。学生の担当は、ここまでである。

こうしたアイスブレークの後、本時の内容に入る。今回は、現行学習指導要領について取り上げた。前回が学習指導要領の変遷に関するものであったため、学生にとっては学習指導要領とは何か、教育課程との関連性や現行に至る歴史的変遷に関しては、既知の事項となっている。

現行の指導要領については、とりわけ教員採用試験において頻出の事項である。授業では、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年）の一部を取り上げ、教員採用試験専門の雑誌を刊行している会社の月刊誌（『教員養成セミナー』時事通信社及び『教職課程』協同出版）を補助資料として用いた。これらの文献・資料をテキストにして要点の解説を行い、次いでそれに関するビデオ視聴（ＮＨＫあさいち「子どもの授業が激変 !2018 教育改革」2018 年１月 10 日放映、一部カット 20 分）することで、教育現場の取り組みを可視化できるように努めた。文字ばかりの資料では、学校現場がどのような状況にあり、教師や子どもたちの姿が見えてこず、イメージしにくいからである。ここでは、「アクティブラーニング」「カリキュラム・マネジメント」「3 つの学力」といったキーワードの確認についても頻出事項であるため、学生には繰り返し丁寧に説明を行うことを心掛けた。

次いで、学習指導要領に関する過去問を演習形式で行い、解答・解説を行った。なお、過去問については、大学が業者（時事通信社）から版権を購入しているものを利用した。また、解説に際しては、実務教育出版「教職教養 2022 過去問」を使用した。

2. 教採の場面指導

教員採用試験における受験指導には、教職教養を中心とする筆記試験とならんで、二次試験で課される場面指導も重要である。教員の資質能力の１つが、学習指導、生徒指導、学級経営の中で日々行われる児童生徒に対する教師の様々な場面における指導（所謂、“場面指導”）である。

昨年度（令和３年）以来、３年次の専門演習Ⅰの最後の授業を４年次の専門演習Ⅲと合同で行い、４年次の学生が教採二次対策として行う場面指導を３年次の学生にも参観させることにした。内容については、愛知県・名古屋市の場面指導の要領に準じ、愛知県は３分間、名古屋市は１分間で学生がそれぞれのテーマに応じて演技を行い、その後それぞれについて質疑応答を行った後、学生たちからのコメントを求めることにした。

なお、二次試験本番では、当日各自に与えられたテーマに基づいて数分間の準備時間を経て実施されるのであるが、今回の場合あくまでも練習であるので、事前にテーマと解き方のヒントについての資料を配付しておき、それに基づいて実施するという手続きを踏んだ。また、それぞれの場面指導については、ワークシートをメモ書きとして配布した。

以下、３年生の感想としては、次のようなものが寄せられている。

「とても有意義な時間でした。１つ１つの場面が、指導の難しい内容であり、先生の技量が試される場面なので、先輩方の指導方法はとても勉強になりました。先輩方の感想も勉強になりました。意見の内容や話し方は勿論、観点の持ち方が自分とは違ったので、なるほどと頷く場面がたくさんありました。自分たちも来年は行う側なのだと思うと、あらゆる場面の対処の仕方を今から考えておかなくてはと思いました。

先輩方の発表は、いずれも素晴らしいものでした。自分たちも１年後、あの姿を後輩に見せられるようになるか不安ですが、今日の授業で教師への目標が明確になったので、頑張ろうと思います。自分が

注目していた点は、目線や話し方でした。児童の立場に立って、話しやすい先生であるかどうかを見ていました。矢田先生のおしゃった、対面で話すのではなく、寄り添うように隣に居ることが最善であることに深く納得しました。学校でのボランティアでも役立つ知見なので、参考にさせていただきます。」

「場面指導は、教員採用試験における人物評価であり、……実践的な指導力が備わっているかを見られるので、その場面に応じた対応ができることが大切だと思います。（中略）児童や生徒の（問題行動への）対応として、その行動を止めさせること、事実の確認をすること、彼らの理解をすること、なぜその行動をしたのか、今後の課題と解決法の提示、保護者への連絡という流れがあります。この流れは、先輩全員がやっていて、内容は異なれど、基本的な流れは同じであることが分かりました。

（中略）

また、学ぶべき点としては、対応するときの姿勢や声のトーン、子どもと目線を合わせること、感情を出すのではなく子どもに理解させながら生徒指導を行うことなどが挙げられます。さらに、演技力も大切で、いかに親身になって見せるのかということも必要になってきます。「傾聴」「受容」「共感」というカウンセリングマインドを持って子どもたちに接し、傾聴するときにも「どうしたの？」「何かあったの？」と聴いてあげている先輩もいて、とても良い入り方だと思いました。しかし、実際には（学校ボランティアの場で自分が経験したことからすると、）なかなか話してくれなかったり、言葉にするのが難しいと感じる児童生徒もいます。そこで、まず「はい」か「いいえ」で答えることができるクローズド・クエスチョンを行い、その問いを発展させてオープン・クエスチョンをするような流れで、私は場面指導をしたいと考えました。また、学校でのボランティアでも、実際の子どもたちへの指導に今回の場面指導で得たことを応用してみたいです。」

「場面指導を受けてどの人も、本当の先生のようでまるである１日の日常の学校の一場面を切り取っているような感じを受けた。どの指導も共通していることとして、児童生徒の話に耳を傾けること、そして受け入れ、共感することが重要だと感じた。その上で、指導すべきことを指導し、理解させるよう努めることが大切である。また、話を聴くときの姿勢、すなわち子どもたちに寄り添うこと、目線を合わせること、声のトーンなど、様々な工夫が求められる。

さらに、やってはいけないことの理由づけも大切である。その際、いじめであれば自殺や教師による指導死を招くこともあり、指導の方向性も見据えて……言葉を慎重に選び、『しっかり』『きちんと』正しい言葉遣いで生徒指導を行わなければならないと思った。」

「自分にはない発想の対応の仕方がたくさんあって、『そんな視点からも見れるのか』、『その角度から見たら、確かにそうだな』といった気づきが多くあった。児童生徒に接する際、正面から向かい合って話した方が良いと思っていたが、実際には相手と“対立”するような気持になる。寄り添うためには、斜めの関係や横に座ることも必要であることを学び、早速今やっている学校でのボランティアでも使えるものであった。」

「児童生徒の目線に沿って話しやすい姿勢で場面指導をしているのが、とても良かったと思いました。どの先輩もしっかり子どもたちの話を聴き、受け入れ、共感していたので、さすがだと思いました。場面によっては、声色を変えて叱ったり、児童生徒を受け入れ、包み込むなど、先輩方の人柄がとてもにじみ出ている指導だと感じました。

（中略）

今回の場面指導を見て、私たちが４年生になってこんなふうに指導できるのか少し不安なったし、発

表した先輩に対する感想やコメントも本質を捉えてポイントを突いているので、すごいと思いました。どの先輩方も、未来の先生像が見えるような気がしました。私も先輩方のように色々な場面を想定して指導できるようにしていきたいし、そのためには学校ボランティア活動を通じて、子どもたちと関わる機会を増やすことが重要だと思いました。」

おわりに

教員養成に携わるようになって30年以上のキャリアを積むことになったが、近年特に重要性を感じるのが、ゼミ運営とその中での人間関係の構築の必要性である。小中学校、高校において学級経営の重要性は改めて言うまでもないが、大学においても“ゼミ運営”のあり方が学生の教育、もっと言えば学生間の教育にとって求められてきていることを指摘しておきたい。とりわけ、教員養成に携わる者にとって、そこでの学生間のやり取り、人間関係、ゼミ内で醸し出される所謂“潜在カリキュラム”（hidden curriculum）が教員採用試験の合格や教員の資質能力の形成に少なからぬ影響を及ぼすことは必定である。

これまで本学において受け持ったゼミ生の次のような体験からも、このことは窺い知ることができる。

「1人目は、5年前の卒業生。1年生から4年生までずっとゼミ生だった。入学当時は、授業中漫画ばっかり描いて遊んでいた（本人談）とか。2年生になっても相変わらずで、締切期限が過ぎても模擬授業の指導案を出さない（出せない）唯一の学生だった。当然、授業もぱっとしないものだった。ところが、3年生になって事態が一変する。見違えるような模擬授業、彼女のすごい授業姿に腰が抜けるほど、驚いた。一体、何があったのか。「模擬授業の指導案を立てている間に、だんだんやっていることがおもしろくなってきた」とか。ここから彼女の教職への本気度が一気に本格化する。それに伴い、成績も急上昇し1年次のGPA 2.2から3年生の時には3.0になり、とうとう現役合格してしまった。「本気で教職を考えています」とゼミ選択の時、研究室を訪ねてきた彼女の言葉が忘れられない。この間、同じゼミ生同士で仲良くなり、勉強仲間を得たことが大きい。仲間と一緒に勉強する中で、教え合い、学び合い、高校の総合学科出身の彼女が苦手とする一般教養も克服したようだ。中学生の時、担任の先生と対立して不登校になりかけ、別の先生の励ましで立ち直り、こうして教師の道を選ぶことができた、と教採の模擬面接の練習時に語った言葉が今でも記憶に残っている。模擬授業を始めた最初のゼミ生で5人しかいない「不人気」ゼミだったが、そのうち2名が現役合格を果たした。当時は小学校の課程がなく、学部全体で3名の中学校合格しかいなかった。女子5名ばかりで和気藹々のゼミ会をよくやり、親睦を深め飲みまくっていたが、それが功を奏したと確信している。」

「2人目は、5年前の男子卒業生。GPA 2.2だった彼が、正直採用試験の一次に合格したと聞いただけでも驚いた。まさに奇跡が起こったとさえ思った。そして、まさかの二次合格の報せ。わが耳を疑った‼彼が○○県の出身で△△市の母校の中学校で教育実習をした際も、学校を訪問してその実習ぶりを参観した。あまり大学の成績は良くないが、一生懸命に水泳指導をやる、これまで見たことのない真摯な姿に「なかなかやるなあ」と思ったのは事実である。普段の外見からは伺えない教師への情熱、内に秘めたる真面目で真剣に生徒に向き合って指導する姿に感動した。今にして思うと、こうした姿を△△市の教育委員会の試験官が評価してくれたのだと思う。（そう言えば、2年次のゼミ選択の時、「現役で絶対合格します」と志望動機に書いてあったことを思い出した。彼は、教採合格を信念に本当にがんばったのだ。）ちょうど、彼の合格と時を同じくして同じゼミの女子学生が△△市の小学校に合格したとの報告を受け取った。彼女も同じ○○県出身で、第一志望の○○県は残念ながら二次で不合格になってしまった。夏休み彼らと一緒に○○県二次対策をやっていただけに、こちらも泣きたくなるほど悔しかった。それだけに、この合格は嬉しかったが、何とこのダブル合格には神の御業と

しか思えないようなからくりがあった。つまり、2人ともわがゼミに入って以来仲が良くなり、お互い教員採用試験を目指してがんばってきたカップルであったのだ。勿論、ゼミメイトからそうした噂は事前に知っていたが、まさかこんな結果になるとは一体誰が想像したであろうか？彼らが付き合い始めたのは4年生になったからとゼミ生は証言しているが、頑張り屋の彼女に男性が触発され、一生懸命に勉強をやり出したというのが本当の所らしい。友人のために教職を頑張る、合格を2人で勝ち取った美談をゼミ生に是非伝えたい。」

また、正規の授業（・ゼミ）以外にもインフォーマルな場における学生同士、あるいは学生と教員との交流の場、コミュニケーションを交わす場の設定も大切である。毎年そうだが3年生の時から何度もゼミ会をやっているが、ゼミ会を企画して、仲間づくりが進み、一緒に教職を目指そうという連帯感も生まれてくる。皆で勉強を頑張るという雰囲気が、共同学習における協働を可能にし、お互いが学び合い、教え合うという学習を可能にするのである。（コロナ禍以降は、ゼミ会は行っていない。）

さらに他方では、「チーム学校」が叫ばれるように、これからの学校は先生同士が協働し合って、学校を成り立たせ、子どもたちを支えていかなければならない。皆と一緒になって1つのことを成し遂げていく、これができるか否かが、まさに教員採用試験の集団討論の場においても試されている。そこでは、各受験生の協調性、協働性が問われる所以である。

学生同士の横のつながり、仲間づくりこそが、大切である。チーム学校に見られるように、今の学校は教職員が皆で協働して教育をやっていかないといけないようになっている。どんな児童生徒、様々な先生や保護者とも関わり合える幅広い人間性が問われている。いろいろな人と仲間になって一緒にやっていける人でないと、教師にはなれない。

但し、あくまでもゼミは「教採合格強化指定ゼミ」ではない。皆が教採合格という、1つの共通の目標においてのみまとまればそれで良い。1人1人個性は違うし、考えていることや思っていることは異なる。すべてを一緒にしてまとまるなど土台無理だし、1人1人は自由であって欲しい。緩やかで自由なつながりで良い。「強制」や「義務」でやらなければならないという窮屈な縛りなど、一切不要だ。ごく自然に、皆が何となく一緒にやろうという自由な雰囲気の中からこそ、本物は生まれる。

緩やかで自由なつながりは、他方で多様な考えを認め、寛容な態度を育むことにもつながる。1人1人異なる子どもたち、いろいろな考え方の先生方、千差万別の保護者が取り巻く学校や学級の中で教師はすべてと関わり、仕事をしていかなければならない。幅広い人間性や自分とは異質なものを容認できる度量や心の広さを培って欲しい。いろいろな人と触れ合う中でしか、こうした資質・能力は身に付かない。人混みの中で揉まれることで、自分を磨くことこそ重要である。

こうした人間関係は持続可能である。有難いことに大学を卒業してからも、教職に就いているOB、OGとの関係も継続しており、そのうち何人かとは連絡を取り合える仲である。教採二次対策を例年のようにやっているが、頼みもしないのに、多くの現役合格の卒業生がボランティアで後輩の受験指導のために馳せ参じてくれる。1年前の合格者であるだけにさすがに指導が的確で、このお蔭で多くの現役生の合格のプラスに有効に働いたのは相違ない。毎年愛知県内外の小・中学校に勤めている卒業生が、盆休みにわざわざ二次対策のサポートに来てくれる。現役の学生が合格ができるのも、彼らが助っ人になってくれたからだと信じている。加えて、卒業生の教師としての成長ぶりを見られるのもこの上ない歓びである。